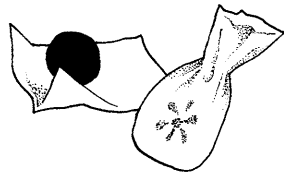


子どもたちへのまなざし (21)

今を生きる

松井 とし



クリスマスの頃になると思い出すことがある。

あれはもう、三年ほど前のことになるだろうか。旧ソビエトが崩壊し、モスクワ中央地下駅にホームレスの人々があふれている、といった状況を伝えるテレビ中継だったと思う。カメラはその中の一組の親子に近づいていった。母親の膝の上で、無心にパンを食べている小さな男の子。今、この時のささやかな幸せを、文字どおり噛みしめ、嬉しさがこみ上げてくるといった子どもの表情。そのようなすをかすかに微笑んで見守る若い母親は、気高く、優雅で、まるでマリアさまのように感じられた。どういう事情でホームレスになったかは知る由もないが、その後の親子の厳しい生活を思い、胸が痛んだ。母親の静かで、寂しげな微笑み。それにひきかえ「今、まさに、この時を生きている」うれしそうな

子どもの姿が、心に焼きついている。

昨年のクリスマスには、新聞にバキスタンのペシャワル山岳地帯の無医地区の人々の診療に当たっておられる中村哲医師の話が紹介されていた。

パミール高原の一角、標高三八八メートルのポローゴル峠に着いた先生は、一軒の小屋から呼ばれて生後十か月の乳児を診察する。手遅れで、息もたえだえの赤ちゃんを診察した先生は、その夜か翌朝までが峠だということ告げる。楽に息が出来るよう抱き方を教え、ひとさじの甘いシロップを与えた。するとその瞬間、赤ちゃんはにっこり微笑んでそして、その夜亡くなったという。

引用されていた先生ご自身のことば。「死にかけた赤子の一瞬の笑みに感謝する世界がある。シロップ一さじのささやかな治療が恵みである世界がある。生きていること自体が与えられた恵みなのだ」(毎日新聞「余録」平成七年二月二三より)。

子どもたちとの生活を離れて久しい今の私は、例年通り事業が無事に終わるたびに、ほっとしてはカレンダーを消している。

悲しいくらいにけなげな幼な子の姿から、感謝を忘れた日々を、受身的に過ごしてきたこの一年を振り返った。

(元幼稚園教諭)